様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１５２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２７３０

研究課題名（和文）『蒼頡篇』を中心とした秦漢簡牘文字に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Research on Chinese Characters on Wooden and Bamboo Slips of the Qin and Han Periods, based on Cang Jie Pian

研究代表者
福田　哲之（FUKUDA, Tetsuyuki）

島根大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：１０２０８９６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：『蒼頡篇』は秦の始皇帝期に作成された小学書であり、後代の漢字に多大な影響を与えたが、その後亡逸し、実態の解明にむけて研究が重ねられてきた。本研究は、漢代の簡牘に書写された『蒼頡篇』を中心に検討を加え、『蒼頡篇』を構成する「蒼頡」・「爰歴」・「博学」の三篇の押韻が、それぞれ特定の韻部に属することを指摘した。さらにそれを手懸かりに各章の順序を推定し、全体構造を明らかにした。本研究によって、『蒼頡篇』の復原が大きく進展し、『蒼頡篇』の文字を分析するための基盤を整備することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の学術的意義は、次の3点にまとめられる。（1）『蒼頡篇』全容の解明に向けて研究が大きく進展した。（2）各章の順序や各章内の文字配列が明らかにされたことにより、『蒼頡篇』の収録字の字義について、さらに正確な釈読が可能となった。（3）『蒼頡篇』を中心に展開した『説文解字』以前の小学史について、具体的な検討が可能となった。また社会的には、漢字や字書の歴史、古代における識字教育の実態など、現代につながる漢字文化に対する理解の深化に意義が見いだされる。

研究成果の概要（英文）：This research elucidates and sheds light on the contents and construction of the Cang Jie Pian, the key character primer made in the Qin Shi Huang period. Cang Jie Pian had significant influence on forms and selection of Chinese characters in later years. However, because of its dispersion, research has continued for its explication. This study, using the Cang Jie Pian which was copied on the Wooden and Bamboo Slips in the Han era, examined that the three chapters, Cang Jie, Yuan Li, and Bo Xue, belong to specific rhyming. Further, this finding helped to clarify the order of the chapters, as well as the whole structure. In other words, this research contributes to the recovery of the Cang Jie Pian, and gives a foundation to analyze key Chinese characters in the Cang Jie Pian.

研究分野：中国文字学

キーワード：蒼頡篇　北京大学蔵漢簡　水泉子漢簡　漢牘　押韻　章序　劃痕

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

『漢書』芸文志・『説文解字』叙によれば、『蒼頡篇』は秦の始皇帝期に作成された小学書（識字書）であり、漢代に入ってからも広く行われ、『説文解字』以前の小学書の成立に多大な影響を与えたことが知られる。このように『蒼頡篇』は秦漢の文字の継承や『説文解字』以前の小学史の実態を明らかにする上で、きわめて重要な意義をもつと見なされるわけであるが、唐代以後に亡逸し、長らくその実態は不明であった。

ところが、20 世紀前半に出土した敦煌漢簡および居延漢簡から、現地の吏卒が手習いした習書の断片や課本の残簡（以下、敦煌本・居延本）が検出され、『蒼頡篇』研究の端緒が開かれた。しかし、これらの辺境出土の残簡は、残存字数の少ない断片が大半を占め、きわめて限定された範囲の検討にとどまらざるを得なかった。こうした状況に対して新たな局面を拓いたのが、1977 年の阜陽漢簡『蒼頡篇』（以下、阜陽本）の出土である。阜陽本は、阜陽双古堆１号漢墓に副葬された竹簡の書物のひとつで、それ以前の辺境出土の『蒼頡篇』とは性格を異にし、内容・構造について多くの知見がもたらされた。

また 2008 年には甘粛省永昌県水泉子漢墓から、それまで知られていた四字句とは異なる七字句の七言本『蒼頡篇』（以下、水泉子本）が出土し、漢代における『蒼頡篇』の多様な実態を示す資料として注目される。

さらに研究の進展をもたらす資料として重視されるのが、北京大学蔵西漢竹書『蒼頡篇』（以下、北大本）である。北大本は 2009 年に北京大学に寄贈された西漢竹書の一つであり、武帝期の頃の書写と推定されている。2015 年 9 月に上海古籍出版社より竹簡の図版・釈文注釈等を収録した北京大学出土文献研究所編『北京大学蔵西漢竹書 壹』（以下『北大竹書 壹』）が出版され、その全容が明らかとなった。北大本の意義は以下の三点にまとめることができる。

第一は、竹簡 70 余枚、残存字数およそ 1230 字という資料数・残存字数の多さである。この字数は、阜陽本の 540 余字を大きく上回り、『漢書』芸文志から計数される『蒼頡篇』の総字数 3300 字の三分の一以上にあたることから、『蒼頡篇』の内容や性格を把握する上で重要な手がかりを提供する。

第二は、竹簡の大部分が欠損のない完簡であり、しかも竹簡の背面につけられた劃痕によって部分的に綴連（綴じた竹簡の順序）が復原され、章の排列や構成などに関する検討が進展した点である。このような全体構造に関する検討は、残存簡のすべてが断簡からなる阜陽本や水泉子本ではほとんど不可能であった。

第三は、北大本以前に出土した漢簡『蒼頡篇』諸本との総合的な検討によって、新たな研究の進展が期待される点である。とくに秦代原撰本の体裁を伝えると推測される北大本・阜陽本と漢代改編本に該当すると見なされる敦煌本・居延本・水泉子本との比較分析は、秦漢における字体や用字などの実態解明に貴重な手がかりを提供するのではないかと予想される。

このように近年、漢代『蒼頡篇』の相次ぐ出土によって『蒼頡篇』研究は新たな局面を迎えており、全容の解明に向けた一層の研究の進展が期待される。

２．研究の目的

これまでの研究によって『蒼頡篇』は、四字句で一句おきに句末字が押韻する二句一韻の形式をもち、篇の冒頭部分などの一部に陳述式を含みながら、大部分が羅列式の句で構成され、同義字・類義字を集中的に配列した一種の事物分類的な性格を有することが明らかにされている。したがって、文字の正確な釈読には、前後の字義的関連や各章の構成を十分に把握する必要がある。このような意図から、本研究は秦漢簡牘文字研究の基盤となる『蒼頡篇』の復原および全体構造の解明を目的とする。

３．研究の方法

上記の目的を達成するため、上述した北大本および水泉子本に加えて、2019 年に新たに公表された漢牘『蒼頡篇』（以下、漢牘本）の三つの資料を中心に研究を行なう。

まず、既発表の関連論文や復旦大学出土文献与古文字研究中心網站・武漢大学簡帛研究中心「簡帛」網・清華大学出土文献研究与保護中心網站などのインターネットを中心に発表されている先行研究を整理し、『蒼頡篇』研究文献目録を作成する。

次に『北大竹書 壹』の「蒼頡篇 釈文 注釈」をベースとして諸家の見解を文字ごとに整理し、それらを踏まえて研究を進めていく。

簡牘研究では、残簡の綴合やばらばらになった竹簡の順序を明らかにする綴連の復原が重要な位置を占め、近年ではとくに竹簡の背面につけられた劃痕による編聯復原の有効性が注目されている。北大本の分析にあたっては、簡背劃痕を用いて中間に缺失簡を含む竹簡の相互関係を推定し、新たな綴連復原の可能性を探る。

水泉子本は木簡に書写されており、『蒼頡篇』の本文にあたる四字句の下に三字句を付加した七字句の形式をもち、本文の復原のみならず、漢代における『蒼頡篇』受容の実態を明らかにする貴重な資料である。しかし、全ての木簡が残簡であるため、これまで十分な検討を加えることができなかった。そこで、北大本との比較分析を通して復原を試み、句式や押韻の実態を明らか

にし、文献的な性格について考察を加える。
　また新たに公表された漢牘本は、牘と称される幅の広い木簡に書写されており、しかも冒頭に章数と見なされる数字の標記が認められ、『蒼頡篇』の全容解明につながる貴重な資料である。漢牘本との比較分析を通して、北大本で試みた綴連復原の検証を行ない、各章の復原および全体構造の解明を試みる。

４．研究成果

　本研究の主要な成果として、『蒼頡篇』の復原および全体構造の解明の進展が挙げられる。以下では、中心資料である北大本・水泉子本・漢牘本の研究成果にもとづき、資料ごとにその概要を記す。

（1）北大本

　北大本において重視されるのは、竹簡背面（簡背）の劃痕により、竹簡がどのような順序で綴じられていたかという綴連の復原に大きな手がかりが得られたことである。『北大竹書 壹』の綴連は、劃痕にもとづくきわめて妥当性の高い復原と言える。ただし、劃痕を利用した綴連復原に関して留意すべきは、劃痕刻入後に書写の錯誤などにより竹簡が廃除された場合には、両簡が連接するにもかかわらず劃痕は連続しない例が存在する点である。したがって、韻部、押韻位置、字義などの諸点で綴連が想定されるにもかかわらず、劃痕の中断が認められる場合は、廃簡の存在が考慮され、想定される廃簡の劃痕と前後の劃痕との間に整合性が認められれば、その蓋然性は高いと判断される。このような意図にもとづき、本研究ではまず『北大竹書 壹』の同一韻部における綴連について、①簡 24～30（魚部）、②簡 63―64―56～62（陽部）の二つの仮説を提起した。

　ここでは具体例として、②の綴連復原図を掲げた（図１：竹簡背面の劃痕を表示するため、実際の順序〈右→左〉と逆〈左→右〉になっている）。『北大竹書 壹』の原釈では、簡 63―64 は簡 56～62 の後に配置されていたが、竹簡相互の字義の関連と劃痕の分析によって、簡 56 の前に廃簡の存在が想定されることから、簡 63―64―56～62 という新たな綴連案を提起した。これにより、章の冒頭簡を缺失するものの、「□輪」章の復原が進展した。

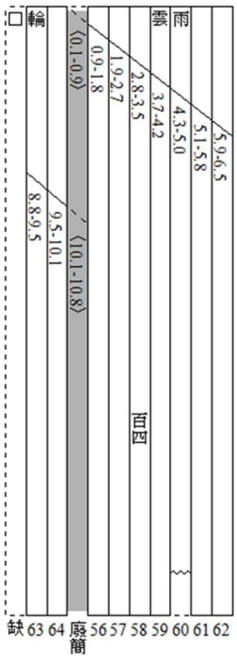

図１　綴連復原図②

　次に『北大漢簡 壹』のなかに少数ながら見いだされる音の近い合韻部の綴連について、幽宵合韻部および脂支合韻部を中心に検討を加え、③簡 12～15―20―21、④簡 44―45―(缺)―(缺)―39―(缺)―40―41―(缺)―42―43 という綴連案を提起した。

　さらに簡 66（耕部）と簡 22（幽部）との二枚の残簡の綴合を指摘し、原釈文（句読位置）の修正により、簡 22 が所属する韻部は幽部ではなく耕部であることを明らかにした。

（2）水泉子本

　水泉子本については、以前に拙稿「水泉子漢簡七言本『蒼頡篇』考―『説文解字』以前小学書における位置―」（『東洋古典学研究』第 29 集、2010 年）において初歩的な検討を加え、文献的性格に関する私見を提起したことがある。しかし水泉子本は全てが残簡で、しかも缺失の大部分が木簡の上半部に集中するという資料上の制約から、その時には限定的な範囲の検討にとどまらざるを得なかった。その後、北大本の公表により、水泉子本と対応する四字句の本文が明らかとなり、残簡の綴合・復原が進展し、より詳細な検討が可能となった。

　本研究では、こうした新たな状況を踏まえ、水泉子本のうち北大本との対応本文が比較的集中して残存する以下の三つの部分を中心に、句式や押韻の実態を明らかにし、七言本の文献的性格について考察を加えた。

　A．北大本［之職合韻部］簡 6～11 對應部分
　B．北大本［陽部］簡 46～55 對應部分
　C．北大本［陽部］簡 63＋64＋56～62 對應部分

　まず、水泉子本の特徴である七字句の句式について、『蒼頡篇』本文に該当する上の四字句に見られる形態上の相違（陳述式・羅列式）に着目し、四字句の下に付加された三字句との関係を分析した。その結果、陳述式では，下の三字句が上の四字句全体を承けて展開するのに対し，羅列式では、陳述式と同様、四字句全体を承けるものと、四字句の一部を承けるものとの両者が混在する状況がうかがわれた。陳述式と羅列式との間にこうした相違が生じた理由については、陳述式の場合は四字句が文章としてのまとまりをもつため、それを承けて三字句を展開することは比較的容易であったのに対して、羅列式は四字句内の構成や字義の関連が多様であるため、全体を承けて三字句を展開することが困難なものも存在し、また同種の事物名が集中的に排列された四字句が連続するような場合も、それぞれに独自の三字句を設定することは難しく、勢い四字句の一部を承けるものが混在する状況が生じた、との推測を提出した。

　次に、押韻について分章との関連を中心に分析した結果、水泉子本は各句の末尾字が押韻し、

章ごとに韻が換わる分章換韻（通押を含む）を原則としながら、複数の章で同じ韻が連続する例も認められることが明らかとなった。さらに上記Ｃの分析の結果、北大本の検討において提起した仮説のうち、簡 63―64―56～62 の綴連復原の妥当性が裏付けられた。

水泉子本に見える毎句押韻の形式は、前漢の元帝期に史游が作成した七言字書である『急就篇』にも共通するが、水泉子本は章ごとに韻が換わる分章換韻を原則とするのに対し、『急就篇』には章の途中にもしばしば換韻が認められ、両者の方式は異なっている。押韻形式との関連から注目されるのは、同じ七字句でありながら、水泉子本と『急就篇』とは句式の基本構造が大きく異なる点である。水泉子本はあくまでも『蒼頡篇』の本文である四字句の展開を中心とし，その下に付された三字句は、上の四字句の内容を敷衍する機能をもち、四字句との関係において個々に独立している（図 2）。一方『急就篇』は七字句を基本単位として展開し、四字句と三字句との間に水泉子本のような一貫した関係性は認められない（図 3）。こうした句式の特色を踏まえれば、水泉子本の七字句は『急就篇』のような識字書とは異なり、むしろ注釈書における本文と注との関係に近い構造をもつと考えられる。

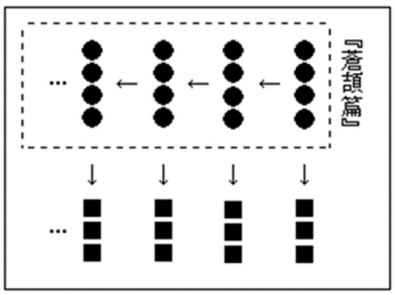

図 2　水泉子本の句式構造

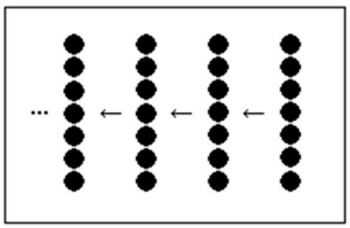

図 3　『急就篇』の句式構造

ここで想起されるのは、『漢書』芸文志に見える「蒼頡伝一篇」の存在である。この「蒼頡伝」については、作者や成立時期に関する記述が一切なく、書名に「伝」とあることや書目の排列などから，かろうじて『蒼頡篇』の注釈書であろうと推測されるに過ぎなかった。本研究では、漢代における「故（詁）」と「伝」という注釈様式との関連から考察を加え、『漢書』芸文志にみえる「蒼頡伝」とは水泉子本のような形式の注釈書であった可能性を指摘し、漢代の『蒼頡篇』注釈史における位置づけを試みた。

（3）漢牘本

漢牘本は、2019 年に劉桓編著『新見漢牘《蒼頡篇》《史篇》校釈』（以下、『校釈』）によって公表された新資料である。牘とよばれる幅の広い木板に、各牘（板）一章六十字（一行二十字×三行）が書写されており、上部には章数とみられる数字が標記され、『漢書』芸文志が記す漢代の閭里書師改編本（五十五章本）の体裁を伝えるテキストと見なされる。漢牘本は、これまで手詰まり状態であった竹(木)簡の綴連復原に有力な手懸かりを与え、『蒼頡篇』の全容解明につながる画期的価値をもつ資料と見なされる。

本研究では、まず漢牘本にもとづき拙稿「北京大学蔵漢簡《蒼頡篇》的綴連復原」（『出土文献与古文字研究』第 8 輯、2019 年発表）において提起した仮説の検証を行ない、以下のような結果を得た（「簡」を付した算用數字は北大本の竹簡編號、○は復原が正しかったもの、×は誤りであったものを示す）。

・同一韻部における綴連復原
1. 簡 24―25　○
2. 簡 64―56　○

・異なる韻部における綴連復原
3. 簡 13―14　×
4. 簡 15―20　○
5. 簡 45―缺簡―缺簡―39　×
6. 簡 41―缺簡―42　×

復原が正しかった三例のうち 1・2 はともに同一韻部における綴連であり、しかも劃痕とともに字義の関連など内容面からの検討が可能な例に属している。北大本において同一韻部内で内容面の関連が認められる場合、劃痕は綴連復原の有力な指標となり得ることがあらためて確認された。一方、誤りであった 3・5・6 は、いずれも押韻の韻部に合韻部を含む部分にかかわる綴連であり、しかも字義の関連など内容面からの検討が困難な例に属している。韻部や内容面からの指標が得られず、劃痕に大きく依存した復原の危険性を示す結果となった。

このように、劃痕を中心とする北大本の綴連復原には限界があり、『蒼頡篇』の全容解明に資する漢牘本の重要性があらためて確認されたわけであるが、同時に検証の過程において疑問として浮かび上がってきたのは、北大本の竹簡の綴連と、『校釈』所収「《蒼頡篇》釈文」（以下、原釈）が示す漢牘本の章序（各章の順序）との間に、齟齬が見いだされたことである。特に不可

解に思われたのは、北大本の一枚の竹簡中において連続する本文を、原釈では別々の章（板）に分離する例や、北大本において綴連の妥当性がきわめて高いと見なされる二枚の竹簡を、原釈では連続しない章（板）に分離する例が認められたことである。

そこで、あらためて漢牘本と北大本との詳細な比較分析を試みた結果、『蒼頡篇』を構成する「蒼頡」・「爰歴」・「博学」三篇の押韻字は、それぞれ以下のような特定の韻部に属するとの仮説が導き出された。

・「蒼頡」（第一章第一句～第廿章第十三句）……之職合韻部、陽部
・「爰歴」（第廿章第十四句～第卅三章第六句）……魚部
・「博学」（第卅三章第七句～第五十五第十五句）……耕部、支部、支脂合韻部、脂微歌文合韻部、脂部、之部、幽部、幽宵合韻部、幽侯合韻部

この仮説にもとづき、漢牘本について再検討を加え、原釈の章序の一部を修正した私見を提示した。本研究によって、大部分の章序の推定が可能となり、『蒼頡篇』の全体構造の解明に大きな進展をもたらすことができると考えられる。

以上、『蒼頡篇』を中心とする研究成果の概要を記した。本研究においては、漢簡『蒼頡篇』を中心とする研究と並行して、秦漢簡牘文字の実態を把握するための比較資料となる戦国簡牘文字についても、清華大学蔵戦国竹簡を中心に検討を加え、字迹（筆跡）の類別を試みるとともに、楚系文字と晋系文字との地域的混淆の実態を明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 福田哲之	４．巻 ―
２．論文標題 漢牘《蒼頡篇》的押韻与章次	５．発行年 2020年
３．雑誌名 復旦大学出土文献与古文字研究中心網站	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 福田哲之	４．巻 1
２．論文標題 清華大学蔵戦国竹簡（壹―七）的字迹与形制―随葬書籍的類別与対其体系性理解―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 East Asian Sinology 東亜漢学	６．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 福田哲之	４．巻 54
２．論文標題 『蒼頡篇』の押韻と章序	５．発行年 2021年
３．雑誌名 島根大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 福田哲之	４．巻 第６５号
２．論文標題 水泉子漢簡七言本『蒼頡篇』再考―七言本成立の背景	５．発行年 2019年
３．雑誌名 中国研究集刊	６．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 福田哲之	4．巻 第8輯
2．論文標題 北京大学蔵漢簡《蒼頡篇》的綴連復原	5．発行年 2019年
3．雑誌名 出土文献与古文字研究	6．最初と最後の頁 264-278
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福田哲之	4．巻 第27号
2．論文標題 『漢書』芸文志所載『蒼頡篇』考	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国語教育論叢	6．最初と最後の頁 123-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福田哲之	4．巻 第64号
2．論文標題 清華簡の字迹とその関係性―第Ⅰ類A・B・C種を中心に―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 中国研究集刊	6．最初と最後の頁 38-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福田哲之	4．巻 第6号
2．論文標題 北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』の綴連復原	5．発行年 2018年
3．雑誌名 漢字学研究	6．最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　4件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 福田哲之
2．発表標題 北京大学蔵漢簡《蒼頡篇》的綴聯復原
3．学会等名 吉林大学古籍研究所 学術講座“日本学者視野中的出土簡牘”（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 福田哲之
2．発表標題 中国古代小学書の復原 ―漢簡『蒼頡篇』を中心として―
3．学会等名 令和元年度島根大学国文学会（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 福田哲之
2．発表標題 『漢書』芸文志所載『蒼頡篇』考
3．学会等名 第72回中国出土文献研究会
4．発表年 2020年

1．発表者名 福田哲之
2．発表標題 漢牘本『蒼頡篇』について
3．学会等名 第72回中国出土文献研究会
4．発表年 2020年

１．発表者名 福田哲之
２．発表標題 清華大学蔵戦国竹簡（壹―七）的字迹与與形制―随葬書籍的類別与対其体系性理解―
３．学会等名 “早期中国的書写：在文本内外”国際学術論壇（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 福田哲之
２．発表標題 水泉子漢簡七言本『蒼頡篇』続考
３．学会等名 第69回漢字学研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 福田哲之
２．発表標題 水泉子漢簡『蒼頡篇』の句式形態―四言本から七言本へ―
３．学会等名 第70回中国出土文献研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 福田哲之
２．発表標題 清華大学蔵戦国竹簡（壹―七）の字迹分類
３．学会等名 中国出土文献研究会公開講演会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 福田哲之
２．発表標題 北大漢簡『蒼頡篇』の編聯復原に関する試論
３．学会等名 第58回 漢字学研究会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 湯浅邦弘編	４．発行年 2017年
２．出版社 汲古書院	５．総ページ数 412
３．書名 清華簡研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関